思うに、お力の心は絶えず二種の葛藤に悩みられていた。現実を痛く、今、の境遇が自分のあるべき境遇ではない、といいう漠とした上昇志向と、父祖がそうであったように自分に転落した人生を生きるよう運命づけられているという宿命も転落した人生を生きるよう運命づけられているという宿命と葛藤があつ。そして、それと葛藤はそれぞれに葛藤あつ、それと葛藤はそれぞれに葛藤あつ。故に、一層お力の心をかなじがらに繋げ、つけていたのであつ。

それに、親由づくという気遣い、この力がお力を孤独を強めていた、その性は反骨で、お力の心を七歳の時の貧窮体験がはっきりと目覚めさせたものであつた。お力の心の葛藤を知る人にとって誰もなく、それが一層お力の孤独感を突っ切ていたのであつ。

そうして、親由づくという気遣い、この力がお力を孤独を強めていた、その性は反骨で、お力の心を七歳の時の貧窮体験がはっきりと目覚めさせたものであつた。お力の心の葛藤を知る人にとって誰もなく、それが一層お力の孤独感を突っ切ていたのであつ。

こうして起こるお力が自らの観念によっていかに自身を拘束しているかということがわかる。お力には現実の境遇を抱束しているかということがわかる。お力が自らの観念によっていかに自身を拘束しているかということがわかる。お力には現実の境遇を抱束しているかということがわかる。お力が自らの観念によっていかに自身を拘束しているかということがわかる。お力には現実の境遇を抱束しているかということがわかる。お力が自らの観念によっていかに自身を拘束しているかということがわかる。お力には現実の境遇を抱束しているかということがわかる。お力が自らの観念によっていかに自身を拘束しているかということがわかる。
ったと思う。

お力が「菊の井」と飛び出して以後の叙述は、当時から
評価が高い箇所である。この箇所は、お力が内面の葛藤の
嵐に隠れる場面であり、又後で結城に「今夜は残らず言ひ
まる」と自らの内面を語る前提ともなるところであるの
で、ここにお力の「思ふ事」の真相があるわけである。見
るの無理なことである。以下それを辿ってみたい。

まず独白の最後の部分「行かれると物なら此様にして唐天竺
の果まで行って仕舞なされ、祖父さんも同じ事であろう。
方がない矢張り私も丸木橋を渡らずはなるまい、父さん
でも踏かせて落して仕舞なされ、祖父さんも同じ事であっ
たといふ、何故に幾代もの恨みを背負って出た私がなければ
の為も残らず言ひた内で仕舞なされ、静かに、自分
人の声も聞えない物の音もしない。静かに、自分
の心は何もほっとして物思ひのない處へ行かれられるであろう
かしら、これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ嫌だ
という部分で実は厭惡する。つまりここでお力の魂は、
自分があるべき生を生きていられないという哭きを声にして叫
んでいるのである。これは強まりくる宿命の観念に必死で
抗うとするものであっただけに、より強く激しくお力を
悶えた。

さらに、何か選んだ自分のこの「渡るにや歓渡らねば」と
いう声がどこからともなく聞えてくる。ところでその呼声
は、実はお力の內面の声だったのである。まるで己の宿命
の生を嘆いたようなその節を声にした時（外部か
ら聴覚器官を伝わってやってきた時）は、お力の心は宿命
に抗おうと、内面の葛藤を続けているのであるが、又もや
同じ呼声が今度は自らの魂の奥底から聞えてきた時、お力
は抗ってもどうしようもない宿命の重さに観念した。「仕
方がない矢張り私も丸木橋を渡らずはなるまい、父さん
方がない矢張り私も丸木橋を渡らずはなるまい、父さん

一方、このお力の観念を、魂の死んだ状態とみるの
は早計である。なぜなら「情な」とても誰れも哀れを思う
の事はしなければ死んでも死ぬ事のないであろう」と
いうお力の観念から出たことばである。

しかし、ここでお力の観念を、魂の死んだ状態とみるの
は早計である。なぜなら「情な」とても誰れも哀れを思う
の事はしなければ死んでも死ぬ事のないであろう」と
いうお力の観念から出たことばである。

一方、このお力の観念を、魂の死んだ状態とみるの
は早計である。なぜなら「情な」とても誰れも哀れを思う
の事はしなければ死んでも死ぬ事のないであろうと、対立する「人情からず義理かず」という心をも捨て
ばければならない。「此様な身を苦労する仕方無しである」と
いうことばで、お力は再度自らに言い聞かせるのである。「親
ゆずりの気違ひで、釈迦の所業に染まり、宿縁で転
落の生を運命づけられている身であるから、人情・義理な
とを考えて行くのは流すだけである。それらを捨て宿命
に開きなよろし。」と、絶対的な宿命観の支配下に自分をお
くことで、精神のバランスを保とうとしたと考えられる。
そう決心したお力の心にひしめき、孤独感が押し寄せ、ついにはそれが現実の存在感を喪失させるほどになる。その孤独感、存在感の喪失状態から救われたのが結城であること。

思い切ったお力の心にひしめき、孤独感が押し寄せ、ついにはそれが現実の存在感を喪失させるほどになる。その孤独感、存在感の喪失状態から救われたのが結城である。

思い切ったお力の心にひしめき、孤独感が押し寄せ、ついにはそれが現実の存在感を喪失させるほどになる。その孤独感、存在感の喪失状態から救われたのが結城である。

思い切ったお力の心にひしめき、孤独感が押し寄せ、ついにはそれが現実の存在感を喪失させるほどになる。その孤独感、存在感の喪失状態から救われたのが結城である。

思い切ったお力の心にひしめき、孤独感が押し寄せ、ついにはそれが現実の存在感を喪失させるほどになる。その孤独感、存在感の喪失状態から救われたのが結城である。
第二節 お力の死

「お力の死」ということについては、その死に方について考えるからだ。源七の心理中か、それとも合意の情死かという点に論が分かれているようである。佐木村子氏が「ごりごり」なる語を用いた部分の解釈について、広島女学院大学語国文学講座の中を閲次以前の研究者の説の分析を行ってみる。ことはできる。ただし、すべての希望を棄て、暗い宿命の力はすでに自暴自棄になっており、絶望的であり生けるべき不存在である。これに「お力の運命」に対し、私たちは何を考えるべきかという問題に陥っている。

前田氏はその著「ごりごりの世界」の中で「無理心」中が合意の中心かという問題設定を無用の法造案であり、「お力と源七は彼岸の救済を約束されているわけでもなく、生き残った者たちの鎮魂の対象であるということを問題にされている」などと述べている。他にも井井喜子氏の「お力の死をとりかえ」という意見は、松坂俊夫氏の「生きり、としては強調する」という見解を持って、彼女の悲劇は一層痛切に強調されることが一葉の意図であったのではないかという見解を示されている。

さて、その「お力の死」であるが、おそらくこれは執筆当初から予定されていたであろう。一葉が腐心したのは、「幾多もの恨みを背負って出たお力の人生をどうするのだろうか」ということであっただけに違いない。
行雄氏は「一葉と日本近代の底辺」を中心に救済する論理や思想を内に描きかねていたのだろう。なお、彼女からの敬意は、悲劇を真に受け入れることで、一葉の死を解釈する例を挙げている。一葉の死は彼女の慰め、悲劇の解決を示すものであり、後世に残る一葉の遺言を理解するためには、彼女の死が物語の結末である。さらに、彼女の死は、一葉が生きていた時代の乱の写真であり、彼女自身が生きるための救済の道を拓くことを示している。